

催眠状態期待と催眠態度が催眠感受性におよぼす影響

清水 貴裕

Effects of Hypnotic State Expectancy and Attitude toward Hypnosis on Hypnotic Susceptibility

Takahiro SHIMIZU

Abstract

The purpose of this study was to investigate effects of expectancy and attitude toward hypnosis on hypnotic susceptibility. Participants rated an attitude toward hypnosis questionnaire and a hypnotic state expectancy questionnaire. Then, they completed the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A. Factor analysis of the hypnotic state expectancy questionnaire yielded two factors: expectancy for loss of control and released potentiality. The result of two-way analysis of variance showed a significant interaction. Low expectancy for loss of control participants demonstrated increased hypnotic susceptibility from low to high level of attitude toward hypnosis. This finding suggest the importance to investigate effects of expectancy and attitude in terms of interactive these variables.

キーワード：催眠，態度，期待，催眠状態イメージ

Key words : hypnosis, attitude toward hypnosis, hypnotic state expectancy, notions of hypnotic states

問題と目的

Barber (2000) は、催眠暗示に対する反応の程度(以下、催眠感受性とする)の高い人の大部分は Positively-set が高い人々であると述べている。Barber (2000) の指摘する Positively-set とは、催眠に対して積極的な態度を持ち、催眠を体験することに積極的に動機づけられており、催眠や暗示されたことを体験できると積極的な期待を持つことである。こうした指摘に示されているように、催眠に対する態度と期待は、催眠感受性の個人差に影響を与える要因であることを多くの研究が明らかにしてきている (Benham, Woody, Wilson & Nash, 2006 ; Kirsch, Silva, Comey & Reed, 1995, Melei & Hilgard, 1964 ; Spanos, Brett, Menary & Cross, 1987 など)。

Spanos et al. (1987) は14項目から構成される催眠への態度尺度を作成し、催眠感受性得点との間に有意ではあるが低い相関 ($r=.28$) を得ており、その他の多くの研究でも同様の知見が得られている。態度と催眠感受性の相関が一貫しているがあまり高くないことについて Barber (1969) は、催眠という用語が言外に多くの意味を持っており、各参加者に正確に同じことを意味しないからであると指摘している。この点について検討する

ために、清水・小玉 (2001) は新たに催眠に対する態度の評価的側面(催眠を「受けたい受けたくない」)に関する催眠態度尺度と、催眠状態に対する知識・信念を測定する催眠状態イメージ尺度を作成し、両者の関連を見ている。催眠状態イメージは、因子分析の結果から、個人の持つ催眠状態についてのイメージが2因子から構成されていることを明らかにした。ひとつは催眠状態になると被催眠者の主体性が失われると考える「主体性喪失イメージ」因子で、もうひとつは催眠状態になると普段以上の何らかの能力を発揮できるようになると考える「潜在能力解放イメージ」因子である。催眠態度とこの2因子の相関係数はそれぞれ主体性喪失イメージ ($r=.10, p<.10$)、潜在能力解放イメージ ($r=.35, p<.01$) であった。これらのことから、人々が持つ催眠状態に対するイメージは大きく2つに分けられ、自分がイメージする催眠状態に対して評価的態度を持つことが示された。また、自分の主体性を失う、催眠者に操られるといった「主体性喪失イメージ」に表されるようなイメージは、従来、催眠に対する否定的な態度と結びついていると考えられていたが、両面的なイメージであることが明らかになった。

一方、催眠に対する期待について Kirsch & Lynn

(1997)は、特定のテスト暗示に被催眠者自身がどのくらい反応できるかという具体的暗示に対する期待あるいは自己予想を反応期待と呼び、催眠感受性との間の関連を検討してきている。反応期待は多くの場合、テスト暗示の直前に「自分が暗示に反応できると思うか、思わないか」を参加者に尋ね、その合計得点を反応期待得点として催眠感受性との関連を調べられる。多くの研究で反応期待は催眠感受性を説明する要因であることが示されているが、一方で、個々の暗示への反応よりも、参加者が「催眠」と認識している状況において、催眠に入っていると受け入れられることが重要であるという指摘もある(Wagstaff, 1998)。こうした立場からすると、重要なのは個々の具体的な暗示への反応期待だけではなく、参加者が思い描く催眠状態、すなわち催眠状態イメージになることに対する期待であると考えられることができる。

このように態度も期待も研究者によって捉え方が異なる面もあるが、ある程度一貫して催眠感受性との間に関連を示されてきているにも関わらず、両変数の関連について検討している研究は少ない。Kirsch, et al. (1995)は、没入性、解離傾向、Fantasy Pronenessといった個人特性と態度、反応期待の催眠感受性との相関関係を調べ、全体として催眠感受性と関連があったのは態度と反応期待のみ(それぞれ $r=.33$, $r=.30$)であったと報告している。しかしこの研究においても催眠態度と反応期待の関連については検討されておらず、両者が交絡もしくは独立した影響を催眠感受性に影響を与えているかについては不明である。

このように催眠態度と期待の関係についての検討が少ないのは、Positively-setの考えに見られるように、ポジティブな催眠態度を持つ参加者は、自身の催眠に入る程度についてもポジティブな期待を抱き、反対にネガティブな催眠態度を持つ参加者は、自身の催眠に入る程度についてもネガティブな期待を抱きやすいという暗黙の仮定があるからではないだろうか。しかし参加者が、自身の持つ催眠状態イメージに対して評価的態度を持ち、一方でその催眠状態イメージに自分になる可能性について予測を持っているとすれば、催眠態度と期待はそれぞれ別の次元の変数であると考えべきであろう。つまり催眠に対してポジティブな態度を持ちながらも、催眠状態イメージのようになる可能性を低く見積もる場合や、反対に自分の思い描く催眠状態イメージのようになる可能性を高く見積もりながら、そのようになる催眠を受けることにネガティブな態度を持つ場合も考慮に入れる必要がある。Kirsch & Council (1992)は、被暗示性は能力、態度、解釈、信念、期待などを含む多くの要因の生成物と考えるのが最も適切であると述べている。こうした点からも催眠態度、期待は別々に検討するのではな

く、それらの相互関係が催眠感受性に及ぼす影響を検討することが必要と考えられる。

こうした観点から本研究では、催眠態度と催眠期待が相互に作用し、催眠感受性や催眠時の主観的体験に及ぼす影響について検討することを目的とした。なお、本研究で検討する催眠に対する期待は、Wagstaff (1998)の指摘や清水・小玉(2001)などを踏まえた上で、被催眠者が自分の持つ催眠状態イメージへの期待、すなわち被催眠者自身が思い描いている催眠状態について、被催眠者自身がどの程度そうなることができるかという主観的確率について検討することとした。

方法

参加者

調査への参加者は、大学生78名(男性54名、女性21名、未記入3名)であった。

尺度

催眠態度尺度：清水・小玉(2001)は、Spanos et al. (1987)の催眠に対する態度尺度を参考に、「自分が催眠を受けることへの関心」を表すような催眠を受けることについての感情的側面、行動的側面を査定する修正催眠態度尺度を作成した。修正催眠態度尺度は全6項目から構成されている。本研究では、新たに6項目を追加した計12項目について、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の4件法で回答するよう求めた。

催眠状態期待質問紙：清水・小玉(2001)の催眠状態イメージ質問紙を用いて新たに作成した。催眠状態イメージ質問紙は、催眠に入るとどうなるかについて51項目の催眠状態について参加者に回答を求めるもので、主体性喪失イメージと潜在能力開放イメージの二つの下位尺度からなっている。今回は、清水・小玉(2001)での因子分析により因子負荷量の高かった項目を各因子10項目ずつ選択した。この項目に対して、「自分自身がそうした状態になると思うか」どうかについて、「そうなると思う」から「そうなると思わない」までの4件法で回答を求めた。

催眠感受性尺度：参加者の催眠暗示への行動的反応の程度を調べる尺度として、Shor & Orne (1962)のハーヴァード集団催眠感受性尺度形式A(以下HGSHS:A)を用いた。HGSHS:Aは催眠誘導と12項目の催眠暗示から構成される催眠感受性尺度である。これはあらかじめ記憶媒体に録音された催眠誘導、催眠暗示が参加者に与えられ、集団への実施も可能となっている。HGSHS:Aの日本語版は笠井・清水・徳田・斉藤(2003)などによって標準化が進められており、妥当性、信頼性も確認されている。

催眠主観的体験尺度：Kirsch, Council & Wickless (1990) によって作成された Subjective Scoring for The Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A を日本語訳したものを使用した。この尺度は HGSHS:A の各暗示項目に対して、客観的に見た場合とは別に、自分自身がどの程度暗示されたことを体験したと感じたかを問うもので、各暗示に対する主観的体験は、5 件法で評定される。日本語版については、清水・徳田・笠井 (2003) によって妥当性・信頼性が確認されている。

手続き

大学講義時間に集団一斉調査で行われた。まず最初に参加者に対し、催眠態度尺度、催眠予期質問紙からなる質問紙を実施し、その後、あらかじめ MD に録音された音声によって HGSHS:A を実施した。HGSHS:A によって催眠を実施するにあたり、途中で気分が悪くなったり、嫌な感じがするようであれば、実験者にそのことを告げて催眠を中断しても良いことを伝えた。解催眠後、参加者は HGSHS:A の質問用紙に回答した。実施時間は約 70 分であった。なお、調査者および調査協力者 1 名によって、HGSHS:A を実施している間に眠っていたり、参加意欲がきわめて低い参加者をチェックした。

結果と考察

催眠を実施している間に、眠っているとチェックされた参加者のうち、調査者と調査協力者の間で意見の一致した者、また回答未記入の者を分析から除外したため、最終的な調査対象者は 69 名 (男性 50 名, 女性 17 名, 未記入 2 名) となった。

催眠態度尺度、催眠状態期待質問紙は、それぞれ「よく当てはまる」「そうなると思う」を 4 点、「全く当てはまらない」「そうなると思わない」を 1 点として得点化された。HGSHS:A 得点は、各暗示に対して、客観的に見て自分が「反応した」を 1 点、「反応しなかった」を 0 点として得点化された。催眠主観的体験尺度は、暗示されたことを「体験した」を 5 点、「全く体験しなかった」を 1 点として得点化した。

(1) 催眠態度尺度、催眠状態期待質問紙の確認

催眠態度尺度が一次元であることを確認するために主成分分析を行った。その結果得られた各項目の第 1 主成分への負荷量を表 2 に示す。各項目への負荷量は .31 から .79 であり、第 1 主成分の説明率は 37.3% であった。また Cronbach の α 係数では $\alpha = .84$ であり、比較的高い内的-一貫性が確認された。これらの結果より、本研究では、催眠態度を一次元の尺度として扱うこととした。

表 1 催眠態度尺度各項目の第一主成分への負荷量

私は機会があれば催眠をかけられてみたい	.787
私は自分が催眠にかかるかどうかを知りたい	.752
催眠がこういうものかを知りたい	.729
自分が催眠をかけられるのは嫌だ	-.714
自分が暗示に反応するのは面白いと思う	.699
暗示に身をまかせてみてもよいと思う	.622
私は自分が催眠にかかることを怖いと思わない	.595
催眠にかかる面白いことが起こると思う	.591
私は自分が催眠にかかるということを人に知られてもかまわない	.497
私は催眠に関係したテレビや本をみるのが好きである	.472
催眠はつまらないものだと思う	-.331
私は自分に催眠をかけられることを不安に思う	-.308

次に催眠状態期待質問紙の 20 項目について、主因子法により因子分析を行った。スクリープロットの結果より、2 因子が適当と判断した。2 因子の累積寄与率は 46.7% であった。著しく共通性の低い項目が見られなかったので 20 項目を用いて再度主因子法プロマックス回転により因子分析を実行した。回転後の因子パターンを表 3 に示す。また、因子間の相関は $r = .53$ であった。因子 I は、すべて清水・小玉 (2001) の催眠状態イメージの主体性喪失イメージに相当する項目であり、催眠によって自分自身のコントロールを失い、催眠者に操られるような状態になるという期待を反映していると考え「主体性喪失期待」と命名した。また、因子 II も同様にすべて潜在能力解放イメージに相当する項目からなり、催眠によって自分が普段以上の能力を発揮できるようになるという期待を反映していると考え「潜在能力解放期待」と命名した。また各因子の Cronbach の α 係数を求めたところ、主体性喪失期待については $\alpha = .90$ 、潜在能力解放期待については $\alpha = .85$ と高い内的-一貫性が示された。

表 2 催眠状態期待のプロマックス回転後の因子パターン

項目	因子 I	因子 II
催眠をかける人に言われることをすべて受け入れて、自分で物事を判断しなくなる	.895	-.260
催眠から覚めた後、催眠にかかっている間の出来事を忘れる	.804	-.155
全ての決定を催眠をかける人にまかせる	.790	-.109
催眠をかける人に対して嘘をつけなくなる	.753	.045
自分自身がしている行動に気がつかなくなる	.666	.055
催眠をかける人に言われたとおりの行動をする	.609	.160
自分自身をまるで別の人間のように感じる	.608	.139
自分で動かそうと思っていないのに身体が勝手に動くようになる	.590	.207
催眠をかける人の言うことに抵抗しようと思わなくなる	.515	.110
考え方が普段とは異なり、論理的ではなくなる	.447	.348
幼い頃の出来事を今現在起こっていることのように鮮明に思い出す	-.199	.870
忘れていた出来事を思い出す	-.221	.783
普段より集中力が増す	.009	.715
普段よりも鮮明なイメージがわいてくる	-.057	.622
普段よりも記憶力がよくなる	.102	.601
普段なら困難なこと(例えばスポーツや対人関係など)を成し遂げる	.219	.485
幼い頃の物の考え方や、行動に戻る	.255	.423
気持ちがかゆったりとして落ち着く	.145	.410
身体の筋肉の緊張がとれる	.215	.408
自分自身が努力して注意を集中しなくても、自然に注意が集中する	.211	.363

催眠状態期待について、先行研究である催眠状態イメージと同様の因子が得られたことから、個人は催眠状態になるとこうなるのだろうと自分がイメージする催眠状態に対して、どの程度自分がそうした状態になれるのかを期待するということが示されたと言えるであろう。この結果は、被催眠者は催眠に入った人がどのように行動するかについての期待を催眠に持ち込むという Coe & Spanos (1992) の指摘とも一致している。こうした自

己のイメージする催眠状態になることへの期待が、Kirsch & Lynn (1997) の反応期待の前段階として存在し、反応期待にも影響を与えていることが推測される。今後、この催眠状態期待と反応期待の関連についての検討が必要であろう。

催眠態度尺度および催眠状態期待質問紙の下位尺度の内の一貫性が確認されたため、各尺度の合計得点を以降の分析に用いた。各尺度の最小値、最大値、平均および標準偏差を表3に示す。

表3 各尺度の最小値、最大値、平均および標準偏差

	<i>n</i>	最小値	最大値	平均値	標準偏差
催眠態度	69	15	47	33.80	7.06
主体性喪失期待	69	10	39	25.70	7.94
潜在能力解放期待	69	10	39	24.96	6.85
催眠感受性	69	0	10	3.97	2.48
催眠主観的体験	69	12	52	27.46	11.22

(2) 催眠感受性と催眠態度、催眠状態期待の関連

各尺度の合計得点により、催眠態度得点、主体性喪失期待得点、潜在能力解放期待得点を算出し、その中央値によって各尺度における高群と低群を分けた。

HGSHS:Aの合計得点(催眠感受性得点)を従属変数として、催眠態度(高・低)×主体性喪失期待(高・低)の2要因分散分析を行った結果、交互作用が有意となった($F(1, 65) = 4.43, p < .05$)。催眠態度の単純主効果について検定を行ったところ、主体性喪失期待低群において有意であった($F(1, 65) = 8.32, p < .01$)。すなわち、催眠を受けると自分が主体性を喪失するであろうという期待が低い群では、催眠態度が低い群よりも高い群の方が催眠感受性得点が高くなるということが示された(表4, 図1)。

表4 催眠感受性得点の平均値と標準偏差(催眠態度×主体性喪失期待)

催眠態度	低		高	
	低	高	低	高
主体性喪失期待				
<i>n</i>	17	16	16	20
<i>M</i>	2.71	4.13	5.06	4.05
<i>SD</i>	1.99	2.52	2.75	2.01

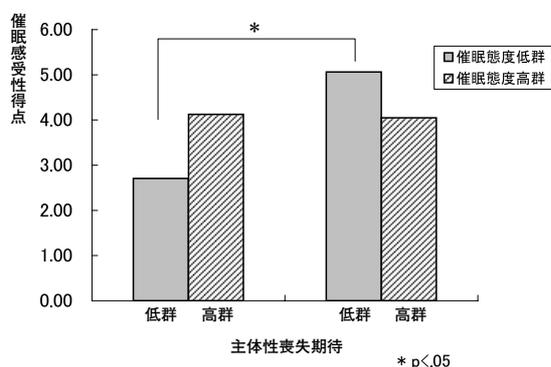


図1 催眠態度と主体喪失期待の交互作用

主体性喪失期待が低く催眠態度が高い群は、主体性喪失期待も催眠態度も高い群と同様に高い催眠感受性得点を示した。今回の結果は、従来多くの研究によって指摘されてきたことと異なり、催眠に対する期待が低くても催眠感受性が高い場合もあることを示唆している。Coe & Spanos (1992) が指摘するように、被催眠者が催眠に入る際に期待を持ち込み、さらに催眠者や催眠状況との相互作用からも期待を提供されることで催眠へと反応すること考えると、催眠を受けることに対して積極的な参加者は、催眠を受ける前に持っていた自分の催眠中の行動への期待が低くても、催眠者や催眠状況との相互作用により、徐々に当初の期待が変容、修正され、催眠暗示への反応が高まっていくと考えられる。今回催眠感受性尺度として使用したHGSHS:Aは、観念運動暗示項目やチャレンジ暗示項目といった運動系の催眠暗示項目が多く、不随意体験が得られやすいため、「催眠をかける人に言われた通りの行動をする」「自分自身がしている行動に気がつかなくなる」といった催眠状態を期待する主体性喪失期待が比較的修正されやすかったと推測される。

次に催眠態度(高・低)×潜在能力解放期待(高・低)の2要因分散分析を行った結果、催眠態度の主効果が有意傾向であり($F(1, 65) = 3.43, p < .10$)、催眠態度の高い群の方が低い群よりも催眠感受性得点が高い傾向があることが示唆された(表5)。主体性喪失期待のような交互作用が得られず、催眠態度の有意傾向のみが認められた理由として、潜在能力解放期待が記憶やイメージなどの能力が普段より高まることへの期待であるため、HGSHS:Aの催眠暗示とあまり合致せず、潜在能力解放期待が修正されることがなかったためと考えられる。

表5 催眠感受性得点の平均値と標準偏差(催眠態度×潜在能力解放期待)

催眠態度	低		高	
	低	高	低	高
潜在能力解放期待				
<i>n</i>	19	14	17	19
<i>M</i>	3.16	3.71	5.06	4.00
<i>SD</i>	2.13	2.63	2.53	2.20

(3) 催眠主観的体験と催眠態度、催眠状態期待の関連

催眠主観的体験得点を従属変数として、催眠態度(高・低)×主体性喪失期待(高・低)の2要因分散分析を行った結果、催眠態度の主効果が有意であった($F(1, 65) = 4.77, p < .05$, 表6)。また、催眠態度(高・低)×潜在能力解放期待(高・低)の2要因分散分析を行った結果についても、催眠態度の主効果が有意であった($F(1, 65) = 4.71, p < .05$, 表7)。

結果より、催眠反応をどの程度不随意的に体験したか

表6 催眠主観的体験得点の平均値と標準偏差
(催眠態度×主体性喪失期待)

催眠態度 主体性喪失期待	低		高	
	低	高	低	高
<i>n</i>	17	16	16	20
<i>M</i>	23.12	25.69	29.38	31.05
<i>SD</i>	9.47	10.69	10.67	11.61

表7 催眠主観的体験得点の平均値と標準偏差
(催眠態度×潜在能力解放期待)

催眠態度 潜在能力解放期待	低		高	
	低	高	低	高
<i>n</i>	19	14	17	19
<i>M</i>	23.79	25.14	29.82	30.74
<i>SD</i>	9.07	11.43	10.48	11.85

を測定する催眠主観的体験においては、どちらも催眠態度の主効果が認められ、催眠状態期待の影響は認められなかった。この点について、先行研究で、催眠主観的体験に対しては催眠態度の方が催眠期待よりも高い影響力を持つという知見は得られていない。しかし、Barber (2000) が指摘する Positively-set のように、催眠を積極的に体験することに動機づけられている参加者の方が、自己の催眠暗示への反応を不随意的な反応として解釈しやすいことは容易に推測できる。今回の結果のみで催眠状態期待は催眠の行動的反応に影響を及ぼし、その行動的反応の解釈（催眠主観的体験）には催眠態度が影響を及ぼしているとは言えないが、催眠状態期待と催眠態度は相互に関連して催眠反応に影響を及ぼしながらも、それぞれ行動や主観的体験への影響の大きさの割合には違いがあるのかもしれない。

以上のように今回の結果は、従来の研究が示してきたように催眠態度と、反応期待も含めた催眠への期待がそれぞれ独立して催眠感受性に影響を及ぼしているわけではなく、互いに関連していることを示唆しており、状況特異的個人内変数同士の関連についてより詳細な検討が必要なが示された。ただし今回の調査は、70名以上の参加者に一斉に HGSHS:A を行ったこともあり、手続き上、十分な環境の下で催眠感受性を測定したとは言えない面もある。標本数も増やし、より精緻なデータで今回の結果について再検討することは必要であろう。

引用文献

- Barber, T. X. 2000 A Deeper Understanding of Hypnosis: Its Secrets, Its Nature, Its Essence. *American Journal of Clinical Hypnosis* **42**, 208-272.
- Benham, G., Woody, E.Z., Wilson, K.S., Nash, M.R. 2006 *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 342-350.
- 笠井 仁・清水貴裕・徳田英次・斎藤稔正 2003 日本語版ハーヴァード集団催眠感受性尺度・形式Aの標準データ 日本催眠医学心理学会第49回大会発表論文集, 25.
- Kirsch, I. & Council, J.R. 1992 Situational and personality correlates of hypnotic responsiveness. In Fromm, E. & Nash, M. R. (Eds.) *Contemporary Hypnosis Research* New York : The Guilford Press. Pp. 267-291.
- Kirsch, I., Council, J. R. & Wickless, C. 1990 Subjective scoring for the Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility, Form A. *Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **48**, 112-124.
- Kirsch, I., Silva, C. E., Comey, G. & Reed, S. 1995 A spectral analysis of cognitive and personality variables in hypnosis : Empirical disconfirmation of the two-factor model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 167-175.
- Melei, J. P. & Hilgard, E. R 1964 Attitudes toward hypnosis, self-predictions, and hypnotic susceptibility. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, **2**, 99-108.
- 清水貴裕・小玉正博 2001 催眠状態イメージと催眠態度との関連 筑波大学心理学研究, **23**, 219-227.
- 清水貴裕・徳田英次・笠井仁 2003 ハーヴァード集団催眠感受性尺度およびウォータールー・スタンフォード集団催眠感受性尺度用体験尺度日本語版の作成 日本催眠医学心理学会第49回大会発表抄録集, 27
- Shor, R. E. & Orne, E. C. 1962 *Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility Form A*. Palo Alto, California: Consulting Psychological Press.
- Spanos, N. P. Brett, P. J. Menary, E. P. & Cross, W. P. 1987 A measure of attitudes towards hypnosis: Relationships with absorption and hypnotic susceptibility. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **30**, 139-150.
- Wagstaff G. F 1998 The semantics and physiology of hypnosis as an altered state: towards a definition of hypnosis. *Contemporary Hypnosis*, **15**, 149-165.